

第五回

みなかみ町俳句短歌大会

作品集

俳句の部

32 人 160 句

※順位について同点の場合は投稿順を優先しました。

※一人の投稿者の受賞は一賞に限定しました。

※入賞・入選以外の作品は投稿順に掲載しています。

※作品中、太字は入賞・入選作品です。

【最優秀賞】 10点

復興へ祈る槌音能登の春

北 雲

【入選】 5点

初蝶や歩き初む兎の前うしろ

平井 登志絵

【優秀賞】 8点

また一つ老舗の消えし名残り雪

林 美佐子

【入選】 5点

戦争が戦争を生む春寒し

関 和子

【優秀賞】 6点

快心の打球の行方風光る

秋 穂

【入選】 5点

うぐいすの声整わぬ雨の朝

山田 高江

【入選】 6点

卒業の生徒見送る無人駅

原澤 芳雄

【入選】 5点

優勝旗群馬に春の甲子園

阿部 伊亨

【入選】 6点

田の神と呼吸合わせて粉を蒔く

澁谷 典子

【入選】 4点

草萌る踏みだす大地農の道

高橋 基一郎

【入選】 4点

餅草の香おり打ち込む杵の音

番場 正夫

【入選】 4点

無人駅花の笑顔に見送られ

林 道子

【入選】 4点

落日を吸ひ込むように鯉のぼり

角田 勝子

【入選】 4点

学童のいない校庭さくら咲く

菜 花

【入選】 4点

逝きし人惜しむ間もなく春も行く

津 恵 女

【入選】 3点

せせらぎは春光となり又空へ

久野 とし華

【入選】 4点

雪形をながめ出陣老農夫

翠 華

【入選】 3点

ゆつたりと雲流れたり春の月

真庭 唯芳

【入選】 4点

春風に鼻唄のせて散歩かな

林 恵美子

【入選】 3点

上着脱ぎ介護施設の花見かな

春 石

【以下、投稿順に掲載】

- 1 風光る空のどこかに詩が湧き 長島 アキ子 19 新品の黄色い帽子風光る 番場 正夫
- 2 トンボーの少し笑ったような口 長島 アキ子 20 入学の子よりもはしゃぐ親の顔 番場 正夫
- 3 吊橋につながる部落豊年祭 長島 アキ子 21 手の平でさいの目豆腐春隣 林 美佐子
- 4 かがとの冷忘れて歩く花の道 長島 アキ子 22 **また一つ老舗の消えし名残り雪** 林 美佐子
- 5 もみじ葉は空に落書きして散りぬ 長島 アキ子 23 春炬燵早も寢息となりし夫 林 美佐子
- 6 朧月無人の駅で時計なる 高橋 基一郎 24 横文字にとまどい多し老の春 林 美佐子
- 7 いかずちや激しき光空に飛ぶ 高橋 基一郎 25 病む人に訃報は告げず夜半の春 林 美佐子
- 8 休日に会話楽しむ春火燵 高橋 基一郎 26 大寒や厨くぐやの妻の愚痴を聞く 秋 穂
- 9 **草萌る踏みだす大地農の道** 高橋 基一郎 27 三寒の痛み四温で癒す膝 秋 穂
- 10 盆栽の年を重ねて桜咲く 高橋 基一郎 28 **快心の打球の行方風光る** 秋 穂
- 11 まだまだと皺くちやな手で春掴む 番場 正夫 29 長閑のどかさやバス停に婆居眠れる 秋 穂
- 12 手作りの箸で飯食う春の野良 番場 正夫 30 **復興へ祈る槌音能登の春** 北 雲
- 13 **餅草の香おり打ち込む杵の音** 番場 正夫 31 春煙や吠えるST 奥利根路 北 雲
- 14 手足投げ宙を仰ぎし春の野辺 番場 正夫 32 春兆すものみな疼く峡の里 北 雲
- 15 春雨や地球掘り行く軒しずく 番場 正夫 33 闇を裂き獣唸るごと虎落笛 北 雲
- 16 修行終へ四方へ散りし春門出 番場 正夫 34 春彼岸触れて墓石に語り告ぐ 北 雲
- 17 行く春や子等の背丈に時を知る 番場 正夫 35 **落日を吸ひ込むように鯉のぼり** 角田 勝子
- 18 大人びた新人生の得意顔 番場 正夫 36 幼な名で呼び合ひ誘ふ新茶の座 角田 勝子

- 37 花衣歩幅をんなに還りゐて
角田 勝子
- 38 散る百の花の心に百の色
角田 勝子
- 39 余生にも一期一会春裕
角田 勝子
- 40 やじろべえ梅の枝木の花と花
久野 とし華
- 41 清明や青いインクで便り来し
久野 とし華
- 42 清明や切れ長の目の阿弥陀様
久野 とし華
- 43 咲くだけの陽をようやくに雪柳
久野 とし華
- 44 **せせらぎは春光となり又空へ**
久野 とし華
- 45 山合いの道端ならぶ雪仏
河合 京子
- 46 春爛漫からだゆらせて香を探り
河合 京子
- 47 ふぐり摘み空にかざして色くらべ
河合 京子
- 48 矢瀬でみる桜のアーチくぐる汽車
河合 京子
- 49 菜の花や空の青さに思い馳せ
河合 京子
- 50 春雷に命を賭けるか不如帰
細谷 龍男
- 51 山笑う今は泪の杉鉄砲
細谷 龍男
- 52 ネギ坊主古の我ここにあり
細谷 龍男
- 53 教え子と机並べて花日和
細谷 龍男
- 54 末娘帰郷にほころぶ梅一輪
細谷 龍男
- 55 春の雲掴めそうまで観覧車
長浜 利子
- 56 桜咲き散歩の時間延長す
長浜 利子
- 57 どの道を歩めど桜満開に
長浜 利子
- 58 頑張つて咲く校庭の老桜
長浜 利子
- 59 学童は疲れを知らぬ葱坊主
長浜 利子
- 60 被災地の復興いかに地虫出づ
遠藤 長代
- 61 誂えの制服ボタン風光る
遠藤 長代
- 62 風光る恐竜待つ駅子の喚声
遠藤 長代
- 63 花^{はな}辛夷^{しんぎ}足湯に吐息の二人かな
遠藤 長代
- 64 光り合ふ初蝶ふはと黄をこぼす
遠藤 長代
- 65 横になりや直寝る癖や春炬燵
杉木 輝夫
- 66 啄木忌明治生まれの父と母
杉木 輝夫
- 67 この森へ一度は帰れ巢立鳥
杉木 輝夫
- 68 使い減りしない体や芋植える
杉木 輝夫
- 69 雉一声朝の空気をかきまぜる
津 恵女
- 70 **逝きし人惜しむ間もなく春も行く**
津 恵女
- 71 太芯のペンよく走る春うらら
津 恵女
- 72 釣る人見る早く釣れぬかと山笑ふ
津 恵女

73	ひとり居や半丁で足りる冷奴	津	恵	女	91	法螺太鼓関の声湧く花の昼	林	好	一
74	春寒やみぞれの夕べ君を焼く	大	塩	俊	92	さくら散るあの人この人おくやみ欄	林	好	一
75	水仙の株分けさそう春の色	大	塩	俊	93	花万朶ほほに紅さす武者乙女	林	好	一
76	春近し古木のくぼみ梅の花	大	塩	俊	94	仕立屋の媪が拝む針供養	翠		華
77	寒村の庭に一りん水仙花	大	塩	俊	95	遍路旅紙縫りで綴る朱印帖	翠		華
78	彼岸入り小雪まじりの墓参り	大	塩	俊	96	池の鯉はねて薄氷割る勇姿	翠		華
79	あちこちと古家に住んで隙間風	原	澤	健	97	雪形をながめ出陣老農夫	翠		華
80	大雪に負けじと耐えて曲り竹	原	澤	健	98	廃屋の庭に居残る桜咲く	翠		華
81	自慢して冬至かぼちゃを配り来る	原	澤	健	99	鳥帰る使命乗せたる羽音かな	平	井	登志絵
82	遠くより眺めて三國春の雪	原	澤	健	100	初蝶や歩き初む兎の前うしろ	平	井	登志絵
83	福寿草陽の暖かくのどかなり	原	澤	健	101	浅間嶺の煙の行方朧かな	平	井	登志絵
84	ジャガイモの芽をかき植える準備す	岡	田	完	102	涅槃 <small>ねはん</small> 西風時に供物も義民の碑	平	井	登志絵
85	うぐいすの声聞きながら骨休み	岡	田	完	103	白梅が過疎を隠せり里日和	平	井	登志絵
86	梅散りしツバキふくらむ雨の朝	岡	田	完	104	をちこちに出で湯のみなかみ山笑ふ	林	恵	美子
87	桜草咲きチューリップ葉が伸びた	岡	田	完	105	春風に鼻唄のせて散歩かな	林	恵	美子
88	早や咲の三光院桜咲く	岡	田	完	106	桜咲きふるさと山河ひかり合ふ	林	恵	美子
89	北斗星双耳を抱く雪晴間	林	好	一	107	そよ風に匂ひたたせて花こぶし	林	恵	美子
90	花抱く今朝の谷川優しけり	林	好	一	108	チューリップ花いちもんめの古る遊び	林	恵	美子

126	日脚伸び散歩の歩数増える古い	林道子	144	襟たてて春の満月仰ぎけり	阿部伊亨
125	推し作家受賞式なる桜咲く	林道子	143	新茶吸む互いの顔をしみじみと	澁谷典子
124	無人駅花の笑顔に見送られ	林道子	142	新学期見守り隊も緒を締める	澁谷典子
123	初蝶 <small>はつちよう</small> の選びし風のやわらかさ	山田高江	141	春愁や歳時記に浮く義兄の句	澁谷典子
122	遠くなる昭和とどめし春炬燵 <small>はるじたく</small>	山田高江	140	初鯉全快祝ふ三代	澁谷典子
121	うぐいすの声整わぬ雨の朝	山田高江	139	田の神と呼吸合わせて粉を蒔く	澁谷典子
120	いつまでの一人と一匹春炬燵 <small>はるじたく</small>	山田高江	138	天空の桜花 <small>おうか</small> 爛漫城下町	原澤芳雄
119	山笑う自己紹介の短くて	山田高江	137	星月夜吾も宇宙の旅人や	原澤芳雄
118	艶やかに生きて果てたや葱坊主	杉木輝夫	136	卒業の生徒見送る無人駅	原澤芳雄
117	熱熱の天ぷら届くふきのとう	関和子	135	春一番旅の電車を遅らせる	原澤芳雄
116	山に住み山の名も知らず山笑ふ	関和子	134	児等 <small>こら</small> の声山に飴 <small>はなま</small> す春休み	原澤芳雄
115	嫋 <small>たお</small> やかに枝垂れ柳の葉風起き	関和子	133	声なくも校庭の桜満開なり	佐藤静代
114	戦争が戦争を生む春寒し	関和子	132	ライダーを追いかけるよに散桜 <small>ちりざくら</small>	佐藤静代
113	友人を見送る悲なし頭にこびる	小野朝耶	131	手放して軽くなりたり木の芽吹く	佐藤静代
112	娘来る昔の思いで今に見る	小野朝耶	130	よもぎ摘む一人を確かめ深呼吸す	佐藤静代
111	孫のたより折鶴に記す涙文 <small>なみだふみ</small>	小野朝耶	129	ひたすらにしゃくやくの芽よ何掴む	佐藤静代
110	老いぼれて身体すべてに傷み苦しむ	小野朝耶	128	露のとう今年の元氣ありがとう	林道子
109	春待つ花におおいかぶさるみぞれ雪	小野朝耶	127	水仙の家族いっぱい独り居に	林道子

160	159	158	157	156	155	154	153	152	151	150	149	148	147	146	145
上着脱ぎ介護施設の花見かな	春寒やSLの声風と去る	朝日浴ぶ枝より落つる彼岸雪	道祖神苔映える下ふきのとう	紅梅や紅白の餅喜寿祝う	寒空に天心の月冴えわたり	古寺 <small>ふるでら</small> の月影蒼し萩の寺	鐘響き香る山門萩の寺	ゆったりと雲流れたり春の月	春風につららも細り露のとう	ことことと小堰 <small>こぜき</small> の流れや水ぬるむ	学童のいない校庭さくら咲く	左から鶯初音運氣よし	優勝旗群馬に春の甲子園	春愁や父逝きし歳近くなり	球根植う芽を確かめて深々と
春	春	春	春	春	真庭	真庭	真庭	真庭	真庭	菜	菜	阿部	阿部	阿部	阿部
石	石	石	石	石	唯芳	唯芳	唯芳	唯芳	唯芳	花	花	伊亨	伊亨	伊亨	伊亨

短歌の部

59
人
260
首

※順位について同点の場合は投稿順を優先しました。

※一人の投稿者の受賞は一賞に限定しました。

※入賞・入選以外の作品は投稿順に掲載しています。

※作品中、太字は入賞・入選作品です。

【最優秀賞】 9点

老いてなほ負けてなるかと胸張るも何しに來たか
忘れ戻りぬ

番場 正夫

【優秀賞】 9点

うつむいてうなづくように揺れ動くうす紫のかた
くりの花

翠 華

【優秀賞】 9点

香ばしく豆炒る妻の背も丸く豆撒く我も足おぼつ
かず

原澤 朝則

【入選】 9点

帰省子の成長ぶりに気づく春手土産そつと仏前に
あり

澁谷 典子

【入選】 7点

もろもろの命の芽ぶき促して母の大地は春を告げ
おり

石坂 作次

【入選】 6点

つまずきは段差ばかりではありません素早く変る
世にもつまずく

角田 勝子

【入選】 6点

目に見えぬ地中のひずみ耐えかねて地上に地震ないの
姿現わす

三池 幸子

【入選】 6点

明日には忘れてしまふ即興の歌をしつこく母に聴
かせる

岡本 有未

【入選】 6点

土少しあれば芽生える石の上に丈低くして犬えふぐ
り咲く

林 恵美子

【入選】 6点

利根の川水清くして悠久の瀬音を奏で流れて速し

真庭 唯芳

【入選】 5点

泣く子負い負けじと闘う日の遠し鎮守の庭のめん
こべーゴマ

眞庭 義夫

【入選】 5点

風になびく枝垂れざくらの花の下に余命短かき夫
とたたずむ

小林 博子

【入選】 5点

バス停を探してるよな外人さん勇気を出して
Can I help you?

杉山 久美子

【入選】 5点

疑わず明日を信じて炊飯器予約ボタンを常のごと
押す

手塚 光子

【入選】 5点

さくら咲く開花予報が写される平和な日本に住め
る倅せ

高橋 吟子

【入選】 5点

「紅麴飲んでなあい？」とメールあり小2の孫の
気づかいうれし

原澤 廣子

【入選】 4点

日々祈る弘法大師遍路道民話の里の古き道行く

長島 アキ子

【入選】 4点

ありがとう頭こうべをたれる幼子よも一つあげたいばば
の年玉

高橋 スミエ

【入選】 4点

渡り来て燕は去年の巣をさがし帰る巣は無く瓦礫
の能登は

長浜 利子

【入選】 4点

それなりの菜園づくりの八十路いま麻痺の手にあ
る土の匂ひよ

遠藤 長代

【以下、投稿順に掲載】

- 1 イベントに発つSLの追憶に遠き昭和の就職列車 眞庭 義夫 19 大仕事なしとげし後コップ水 水より旨うまきものはなかりき 林 いくじ
- 2 泣く子負い負けじと闘う日の遠し鎮守の庭のめんこーゴマ 眞庭 義夫 20 集落に店はあっても物はなし学校帰りにどどめを食べし 林 いくじ
- 3 利根川のほとりに石を積み上げて住むはわが家川霧晴れる 眞庭 義夫 21 尾を垂れて休む時ある鯉のぼり弱い風には見向きもしない 林 いくじ
- 4 雪道に女の先生来るころと落し穴など作りし昭和 眞庭 義夫 22 原木の栽培きのこ道の駅たちまち今日も売れ切れました 林 いくじ
- 5 名をもたぬ山の囲みしわが庭に背伸びをすれど赤城の見えず 眞庭 義夫 23 行商車ぎやうしやぐるま『春が来た』歌流しくる過疎地の人らおのおの寄りぬ 林 いくじ
- 6 日々祈る弘法大師遍路道民話の里の古き道行く 長島 アキ子 24 過ぎて行く電車の響き感じつつ踏切に立ち行き先を見る 番場 正夫
- 7 お金入れつり銭取つてと言ふ「レジ」に働かされて買物終る 長島 アキ子 25 大峰の影を映せし沼しずか神心のごと水は澄みたり 番場 正夫
- 8 陽炎の気ままな老の土いじり薬りたしかむポケットの中 長島 アキ子 26 老いてなほ負けてなるかと胸張るも何しに来たか忘れ戻りぬ 番場 正夫
- 9 夫病めばジャングルのごと夏草は畑一面に覆ひかぶさる 小林 博子 27 あくせくと日々を過ぎてふと気付く吾が手の皺に時をおぼゆる 番場 正夫
- 10 待ち待ちしトマトは熟し喜びしも猿に喰われぬ五十個程を 小林 博子 28 平凡な日々を望みて皆生きる人それぞれに我が道を行く 番場 正夫
- 11 十一箇月ぶりに会ひたる弟よああと大きな声を出したり 小林 博子 29 呆けるには未だしばらくと思いつも我が身疑うボカの増えたり 番場 正夫
- 12 風になびく枝垂れざくらの花の下に余命短かき夫とたたずむ 小林 博子 30 高齢化するすむ我が町無人駅商店街の人影も消ゆ 番場 正夫
- 13 吾の振る鍬先に雉子は来て餌をあさりをり恐れもせず 小林 博子 31 職退きて故郷戻れば過疎進み昔の祭りすでに消え去り 番場 正夫
- 14 わたくしの光の君は猫の茶々文送らねど日毎訪ひ来る 杉山 久美子 32 美しき言葉彩どる地球にて人が争い生きる醜さ 番場 正夫
- 15 供なふ者尋ねゆく者あまたみてみなかみ紀行は紡がれゆきし 杉山 久美子 33 老いたれど気力は常に失わず微力なれども世に奉仕する 番場 正夫
- 16 バス停を探しているよな外人さん勇氣を出しCan I help you? 杉山 久美子 34 穏やかな日和りとなりし七回忌相撲よろこぶ父の顔浮かぶ 奥村 清美
- 17 プレートのなすがまゝなる日本列島揺すられ曲げられ押し上げられて 杉山 久美子 35 大雨に残り雪とけ流れゆく猿の食害白き枝あまた 奥村 清美
- 18 二千人日毎減りゆく日本よ実感無けれどそれが現実 杉山 久美子 36 黄砂にて霞のかかる四方よもの山飛行機雲もかすんで見ゆる 奥村 清美

- 37 息子には追いつけないと息をつく足に重りはないはずなれど 奥村 清美 55 大峰の入植深く鍬の音に噴煙高し国境浅間 野澤 武
- 38 草引けば「がんばつてるね」と声のするシニアカー止め隣人ほほえむ 奥村 清美 56 山門の十二の柱泰寧寺一本だけが他の木と言うが 野澤 武
- 39 耐えに耐え復興めざす能登の同胞槌音高く明日に幸あれ 石坂作次 57 帆掛舟風は凧いでる何処へ行く蟻が羽根曳く炎天の秋 野澤 武
- 40 もろもろの命の芽ぶき促して母の大地は春を告げおり 石坂作次 58 どのように生きてても一生人は人ミルクコーヒー花びら開く 久野 とし華
- 41 早春にはや目覚たる牡丹の芽圃いの縄目心ろして解く 石坂作次 59 移り住み白梅一本老木に吾家に今も幸わせ運ぶ 久野 とし華
- 42 冬を越し陽さしに育つ唐菜つみふる里の春子等に送りぬ 石坂作次 60 庭すみにすずらんの花みつけたよやはらかき風が香を放し 久野 とし華
- 43 隔週の空き瓶回収の朝に見るこの家の酒豪の健在ぶりを 角田 勝子 61 新しき出逢ひの四月五日かな辻の地蔵と長話しする 久野 とし華
- 44 ウオーキング足を止めてのクローバーあつたないはで幸福探す 角田 勝子 62 清明の畦は晴ればれ踏み出でし子供頃の菜の花歌ふ 久野 とし華
- 45 つまづきは段差ばかりではありません素早く変る世にもつまづく 角田 勝子 63 新婚の賀状はモノクロ谷川岳終活ノートに一葉のこす 田村 鶴江
- 46 ふきのとう摘み来てめぐる料理本挟みしままの葉っぱの栞 角田 勝子 64 「右手親、左小指から折りましょう」笑いの絶えぬ老人クラブ 田村 鶴江
- 47 三姉妹一人になりて山坂を越えて今年も桜満開 角田 勝子 65 脳トレの共通一字の四字熟語 この語ありしか字引ひき寄す 田村 鶴江
- 48 追儼の福を願いて寄る窓にいま冴え冴えと満月昇る 手塚 光子 66 幾昔遊びしものか紙風船もらひて惑ふ小さき口づけ 田村 鶴江
- 49 満開の桜の下で三世代そろいて写す孫の進学 手塚 光子 67 朝まだき宙は紺青十日月松の梢を玉座となして 高橋 スミエ
- 50 孫五人曾孫二人と授けられ最はや望まずその上の幸 手塚 光子 68 三吹きしてのどおうるおす岩清水うつわは露の葉香りや惚ふ今は 高橋 スミエ
- 51 戦時下の物資不足が身につきて不用の品も処分できずに 手塚 光子 69 ありがとう頭をたれる幼子よも一つあげたいばの年玉 高橋 スミエ
- 52 疑わず明日を信じて炊飯器予約ボタンを常のごと押す 手塚 光子 70 自然治癒ならずか帰らぬ愛猫よご返事おくれと今日も又呼ぶ 高橋 スミエ
- 53 春朧やつと花着く福寿草荒れた傷跡無慚や猪の 野澤 武 71 里山も新幹線や高速道負けじと走る上越線 高橋 スミエ
- 54 尾瀬ヶ原水のみななみ登り来て坤六峠も紅葉替えて 野澤 武 72 さくら咲く開花予報が写される平和な日本に住める倅せ 高橋 吟子

73	利根川にそうて咲き初 <small>はじ</small> むさくら花対岸よりの眺め美し	高橋	吟子	91	青空に球児の雄叫びびびき合ふ偉業の賞杯郷土群馬に	遠藤	長代
74	さくら咲き谷川岳の雪まばら田畑に人の動く影みゆ	高橋	吟子	92	谷間 <small>たにあい</small> に雪解け混じる山の音小流れ育ついつか大河に	遠藤	長代
75	降る雪のやむ日続きてのぞき出るパセリの青に心浮かるる	三池	幸子	93	兵たりし過去語り聞く昼下り今戦乱の外 <small>と</small> つ国想ふ	遠藤	長代
76	目に見えぬ地中のひずみ耐えかねて地上に地震<small>な</small>の姿現わす	三池	幸子	94	春場所が新入幕の尊 <small>たけ</small> 富士あつと言う間に賜杯を抱 <small>いだ</small> く	杉木	輝夫
77	数日の明け方の夢摩可不思議過去のことども脳のいたずら	三池	幸子	95	晴れ渡る利根の川辺の散歩道鶯の声聞きつつ歩く	杉木	輝夫
78	ふはふはと生き永らひて老ひたる身古木の先に花芽を見たり	三池	幸子	96	相方と折り合う術を捜しつつ白髪頭の老爺となりぬ	杉木	輝夫
79	泉岳寺秘宝公開巡り合ひ梁に掛かるる揮毫の数々	三池	幸子	97	洪水に根こそぎ流れ着きたるか利根の中州に咲く黄水仙	杉木	輝夫
80	うまいんだぞゆすらの赤実ほおぼりて七十路の夫わらべにもどる	木村	美里	98	亡き母の育てし鉢の君子蘭少しか細く我家に咲けり	吉田	まゆみ
81	己が身に起きて他人の痛み知る後悔先に立たずを想う	木村	美里	99	大根と猪肉煮ればほろほると甘辛き味舌に泌み入る	吉田	まゆみ
82	疲れたが口ぐせとなり去年今年哀しくもあり老うるといふは	木村	美里	100	思ひ出のご飯は何と尋ねれば「けんちん汁」と吾子は答へし	吉田	まゆみ
83	雨戸開け雪と見まごう大霜に昼はぬくしと亡き母の言	木村	美里	101	モップかけ一息ついて見てみれば猫の足あと点々と有り	吉田	まゆみ
84	隅田川ゆつたり揺れる屋形船河岸の桜愛でてカンパイ	長浜	利子	102	気忙しくガラス拭きする足元に絡まる猫のまん丸瞳	吉田	まゆみ
85	渡り来て燕は去年の巣をさがし帰る巣は無く瓦礫の能登は	長浜	利子	103	しんしんと雪降り積もる歳の暮れつきたての餅口にほうばる	宮崎	りえ子
86	梅香る春の夕暮散歩する犬は飼主引いて家路へ	長浜	利子	104	揚げ物や油を控えダイエットそれなのに手がお菓子にのびる	宮崎	りえ子
87	真青なる蒟蒻畑の上空で雲雀囀りりサイタルのごと	長浜	利子	105	あかね橋超えて向かうは四方の宿熱めのお湯に憂いを流す	宮崎	りえ子
88	悠々と鳶は大空旋回し地上の小鳥あたふた騒ぐ	長浜	利子	106	草むしり広い畑がすつきりと心のモヤも一緒に晴れた	宮崎	りえ子
89	今日咲くか明日は確かと開花待つ報道合戦国花愛でたり	遠藤	長代	107	足利のフラワーパーク電飾と友達の声スマホを飾る	田中	春枝
90	それなりの菜園づくりの八十路いま麻痺の手にある土の匂ひよ	遠藤	長代	108	暗い時自分に向けて明るさを調節出来る懐中電灯	田中	春枝

- 109 わたくしの意思はふわふわマシユマロで義理はバリバリかりんとう 田中 春枝
- 110 箸先でのの字を書いて寝めるから十七番はサバの塩焼き 田中 春枝
- 111 続けること咎めるように散ってゆく花火のようにコスモクロック 篠原 香代
- 112 いつからかかぬふくよりもやまや派に明太子手に母のため息 篠原 香代
- 113 ハンドルを握る横顔見とれつつ慌ててパキッ モナカを渡す 篠原 香代
- 114 誰にでもひとこと添える「気をつけて」ふんわり残して またすぐ逢える 篠原 香代
- 115 泣く孫を背負って走る力ある私に任せてご機嫌取りは 小林 はつ江
- 116 生きている今日の幸せ感謝して前に進もう明日を信じて 小林 はつ江
- 117 孫三才和服は姫様 ドレスでエルサに成りきりすかさずパチリ 小林 はつ江
- 118 どんどん焼き、花豆、柿ピー、うまい棒、口元ゆるむ菓子のネーミング 小林 はつ江
- 119 恩師から写真が届くとナカイと植木の光るらしくない庭 岡本 有未
- 120 **明日には忘れてしまおう即興の歌をしつこく母に聴かせる** 岡本 有未
- 121 黒糖の照りがなんとも悩ましい北海道揚げの記憶を食べる 岡本 有未
- 122 どうしても真似したくなる声があるショップ店員「いらっしやいませ」 岡本 有未
- 123 窓際に満月のぞきうす明かりほほをそめてか初恋気分 深代 里子
- 124 みんなのねお宝なのよ歳せおいとこととことと今を生きるの 深代 里子
- 125 人として幸せ時間お菓子かも体内リズム喜びそうね 深代 里子
- 126 毎日をそのまま過ごす老婆かも子供にもどり幸せ時間 深代 里子
- 127 おさがりの兜の横でピースする写真で知った五歳の記憶 大山 智也
- 128 冬に咲く光の中で待ち合わせマフラー巻いて手袋はめて 大山 智也
- 129 暗い部屋こんなことならさようならすれば良かった明るいうちに 大山 智也
- 130 遠足のおやつは三百円まで 素敵な君はチョコパイ選ぶ 大山 智也
- 131 一歳差追い付きたくて弟は今日もコタツで平仮名練習 本多 寿美枝
- 132 キネマ通りアーチの階段見上げればダンスホールのこぼれる明かり 本多 寿美枝
- 133 金曜日銭天堂の紅子さん十円持って逢いに行きたい 本多 寿美枝
- 134 ぐちゃぐちゃに絡まり切った糸の端そおうとそとと摘まんで引いて 本多 寿美枝
- 135 トランプで手品をしてく切りながらカラクリ探し見破る瞳 篠原 忠
- 136 歌会で自信あっても意味不明考え抜いた果てのめいあん 篠原 忠
- 137 優勝を目指すジャパンのヒリヒリは守りと攻めでオーラが吠える 篠原 忠
- 138 「好きなんだ」恋する気持ち永遠だ君の瞳に約束しよう 篠原 忠
- 139 もう時間が無いと泣き崩れる拉致問題は遣る瀬無き真実^{こと} 津 恵
- 140 三月はまだ咲く花は少なくて蜂達ふぐりを抱きて蜜吸ふ 津 恵
- 141 名入れの箸互の好みで思い出と加茂川堤に休み見せ合ふ 津 恵
- 142 鐘楼や御殿桜や石垣よし天守閣は未だ幻 津 恵
- 143 心地よく春風にゆれる洗濯物庭に泳いだ鯉職想ふ 津 恵
- 144 我が学びライフワークとせむがためせめて二行ページをめくる 服部 文男

- 162 学校の昼食知らせるチャイム鳴る新一年生の姿浮びく 石坂 喜美江
- 161 雪残る土手に咲き初むる黄水仙利根のせせらぎ聞き入るがごと 石坂 喜美江
- 160 常ならば身の丈積もる庭の雪花くき短き福寿草咲く 石坂 喜美江
- 159 雪被く谷川岳と空霞むわが里いよよ春ならんとす 石坂 喜美江
- 158 うらわかき初音を聞きて夫を呼ぶ霞たなびく山畑に立つ 石坂 喜美江
- 157 雪代はミネラル含みとうとうと海を潤す旅の始まり ベネット 昭子
- 156 白木蓮ソメイヨシノの紅白は新入生を祝し満開 ベネット 昭子
- 155 師と仰ぐ万智さんに会え感無量歌の始まりサラダ記念日 ベネット 昭子
- 154 買い物はカゴに半分だけなのにレジの数字は予想上まる ベネット 昭子
- 153 来る年も時違はずに満開の大山桜見せ場を放つ 荒木 洋子
- 152 遊歩道の傾りに芽吹くふきのたふ春の香りを指先に摘む 荒木 洋子
- 151 彼岸入り水仙ふくらむ野の辺り峡の芽吹き足音を聞く 荒木 洋子
- 150 除雪機のライトの先に暗闇の光となりて新雪飛びし 荒木 洋子
- 149 如月の凍み入る手もて朝あさに湯呑みで暖取り今日を始まる 荒木 洋子
- 148 ふるさとの青森恋し雪の降るひばりも泣いた津軽のリングゴに 服部 文男
- 147 いつの日も傷つくことを恐れつつびくつき生きた吾はみの虫 服部 文男
- 146 病室へ見舞のドアに足止まりかける言の葉千々に迷いぬ 服部 文男
- 145 里帰りなつかしき人久々に灯明見つむ御仏の前 服部 文男
- 180 ドーナツの穴を覗いて見る空は少し気取ったピンホール写真 小林 恵美子
- 179 雪明かり友とはしゃいだ帰り道電信柱の青い影踏む 小林 恵美子
- 178 毎日を重ねた歳はミルフィーユ少し焦けて甘くて苦い 小林 恵美子
- 177 山坂を共に越え来て倒れ伏す感謝あるのみ糟糠の妻 翠 華
- 176 嫁ぐ朝桜湯くくむ親と娘やうれし涙で送る言の葉 翠 華
- 175 暁の湖上に群れる鶴啼いて今先兵が北に飛び立つ 翠 華
- 174 刈りこぼす若布寄せ来る磯めぐり婆や子供がひろう島影 翠 華
- 173 うつむいてうなづくように揺れ動くうす紫のかたくりの花 翠 華
- 172 この春も我が家の花壇咲き初めしラッパ水仙清く明るく 林 好一
- 171 国道の路肩に咲きし桜ありしだけ優しき手入れ満足 林 好一
- 170 晴れた日の散歩電動カートにて裏道通りノロノロと行く 林 好一
- 169 雪の日も僅かに積もる駐車場杖を頼りに雪を除きし 林 好一
- 168 物価高八十路二人の旅歩き地図で見るだけこの春にして 林 好一
- 167 未娘赤子の動画の写メ届くしゃべれぬ孫とハイタッチする 原澤 廣子
- 166 「これなに？」わからぬ我は夫に聞く調らべ検索答えし我に 原澤 廣子
- 165 「紅麴飲んでなあい？」とメールあり小2の孫の気づかいうれし 原澤 廣子
- 164 花見消え忘年会消え集い消え人のつながり細くなりゆく 原澤 廣子
- 163 健康に良いと飛び付く食材に三日坊主でそのままとなり 原澤 廣子

198	この地球百年先は沸騰化予言だからと軽く笑えず	原澤	朝則
197	畑から「食わねいかい」と土の手でじゃが芋渡す人良い農婦	原澤	朝則
196	香ばしく豆炒る妻の背も丸く豆撒く我も足おぼつかず	原澤	朝則
195	住い余生一人老爺の節分は一合爛酒二匹のメザシ	原澤	朝則
194	氷塊の重さに耐えて枝垂れたる岸辺の柳芽吹く春待つ	原澤	朝則
193	ゆったりとジンベイザメは旋回す春眠が降る水槽の底	多々納	萌
192	この声の群れはかもめ？目を覚ます未明の宿で耳を澄ませる	多々納	萌
191	恋人であふれる街のイルミ見に一人出かけた妹強し	多々納	萌
190	すべらかに丸い小石の肌なぞり海中で経た歳月はかる	多々納	萌
189	薪を割る先祖伝来斧使うまだまだ遠し特技までには	本多	義二
188	カレンダー残り一枚今年の石油ストーブ二十歳となりぬ	本多	義二
187	柿の種カップえびせん酒は○ポテトチップスみそ汁に浮く	本多	義二
186	門松も倒してしまふ元日の明かりが消えて闇が近づく	本多	義二
185	春休みテレビの前で歓喜する健大高崎、初優勝	大山	真紀枝
184	グラウンドをかける向こうは満開の桜が咲いてサッカー日和	大山	真紀枝
183	句を過ぎボヤけたリングあまつたらアップルパイでホームパーティー	大山	真紀枝
182	沼田駅イルミネーション見たいけどいつもの角を曲がって帰宅	大山	真紀枝
181	旨い店あなたに聞けばわかるわねそうなの私 歩く食べログ	小林	恵美子
199	土少しあれば芽生える石の上に丈低くして犬ふぐり咲く	林	恵美子
200	うすれゆく亡夫との旅を鮮やかに思ひ起こさる桜前線	林	恵美子
201	前山の桜は村の名所かな居ながらにして見る花模様	林	恵美子
202	庭畑の草引きをれば目の前に今年最初の蛙に出あふ	林	恵美子
203	桜咲き里山の木木それぞれに色彩みせて芽吹き <small>は</small> の美しき	林	恵美子
204	春の庭芝生の上で子猫達自分の影に踊る猫ダンス	小野	朝耶
205	ぼたん咲き思い出の中に入りびたる妻の笑顔が庭にのこりし	小野	朝耶
206	ふるさとの父母を夢みて涙あり夜半の月に心とどける	小野	朝耶
207	九匹のねこ庭のベンチで日あびする静かな春に桜花舞い来る	小野	朝耶
208	庭先で黄色い花に春を知り枯木の如くの我を見返る	小野	朝耶
209	ブランドも安値に売らる時計でもどれも同じく時を刻みし	関	和子
210	トルストイもロシア民謡も好きだった青春を消す許せぬ国に	関	和子
211	国会は裏金と言ふ疑念持ちうやむやにして議事進まざる	関	和子
212	車椅子気を付けてなと笑添えて母の子でいるありがたさかな	佐藤	静代
213	アスファルトわずかな隙間タンポポが咲いておるぞと顔出しにけり	佐藤	静代
214	大満月すべてのものを照らし出し心の中まで視られているのか	佐藤	静代
215	雪解水集めて早し千曲川競いて走る飯山線よ	原澤	芳雄
216	大手門抜けて見上げる名古屋城天守に輝やく金の鯨 <small>こじ</small>	原澤	芳雄

234	233	232	231	230	229	228	227	226	225	224	223	222	221	220	219	218	217
転がれる麦わら帽子追いかけてわずかな坂も息切れをする	行き合いの人と語らう無人駅にわかには春の雪降り始む	初物のふきを入れたる餅食むに春の苦さが口に広がる	病院の長き廊下を点液と酸素を付けて重く歩みぬ	蕾持つ水仙の花に追肥する暖かき陽さし受けつつ待ちぬ	さくら花蕾はピンクに色づきて咲く日待たれる今日此頃に	所在なく窓辺に一人横たへば見るは行方定めぬ雲ばかり	若者の感謝と決意心打つこれぞ苦しき災害に勝つ	山里に雉子の二声ほのぼのと妻子を呼ぶや桜散るなか	桜にも侘びしき色の浅みどりもの思はする鬱金桜よ	帰省子の成長ぶりに気づく春手土産そつと仏前にあり	センバツの優勝旗手に凱旋の健大球児言葉頼もし	初夏の風青葉若葉を誘いて小鳥の声もそつとのせくる	上越線開通百年祝えども渋川駅も無人となるや	両陛下能登ご訪問跪すき民を気遣うお心頭	雪残る参道歩み見上げれば阿吽の仁王吾を迎える	波の音聴きつホームで電車待つひとりみちのく五能線の旅	櫻掛け凜々しき乙女放ちし矢的を射抜き桜花散らして
大川 美知子	大川 美知子	大川 美知子	大川 美知子	菜 花	菜 花	中島 早苗	中島 早苗	中島 早苗	中島 早苗	澁谷 典子	澁谷 典子	澁谷 典子	澁谷 典子	澁谷 典子	原澤 芳雄	原澤 芳雄	原澤 芳雄
252	251	250	249	248	247	246	245	244	243	242	241	240	239	238	237	236	235
頬張ってこれで最後と決めたのに翌日レジでお財布開く金子	頑張れる私はゲッターズ公認のおだてに弱い正義の味方金子	探しても見つからない困ったな あ、嫌なことも寝たら忘れる金子	柿色が山の端から広がってやつと明ける早朝出勤	雨の午後アントワネットは何想ふ鉱物のやうな重を齧る小室	冬至すぎ祖母の言葉を思い出す米粒ごとに日が長くなる小室	シャンパンの泡泳いでるグラスかな暮れの街路樹しずかに光る小室	歳とると重なることの違い問うパウムクーヘン削ぎながら君小室	真夜中にトイレに起きて眠れない不安を五十七歳で知る加藤	応援は 行きがかり上だつたのに「明大行け」と 旗振り叫ぶ加藤	年末の 青い洞窟 (懐かしい) ブルーマン重なる君の顔加藤	大通り挟んだ店で菓子ぱんとコーラ選んだ祖父との思い出加藤	一夜にて絵本の中に入るやうな弥生の大雪笠地蔵見す	いつになく髪形整ひ雨の日を籠りて居れば足が急かせる	小四の金井先生に直されて八十歳の君付けちゃん付け	歌会果て帰るみちみち清清し踏み込むアケセル押へつつゆく	全国の小学校の数知らず大谷グロブ届きたる報	見渡せば雪雪雪と輝ける利根の山奥朝日を浴びて
金子 美由紀	金子 美由紀	金子 美由紀	金子 美由紀	小室 史	小室 史	小室 史	小室 史	加藤 南風	加藤 南風	加藤 南風	加藤 南風	眞庭 ヨシ子	眞庭 ヨシ子	眞庭 ヨシ子	眞庭 ヨシ子	眞庭 ヨシ子	大川 美知子

260 259 258 257 256 255 254 253

芭蕉句碑桃野下牧月夜野に吟詠楽しく心ときめく
真庭 唯芳

初夏匂う八十八夜の山は萌え空駆ける鯉輝きて見ゆ
真庭 唯芳

真夏日の花はしおれて蟻も見ず日差は高く草原白し
真庭 唯芳

冬隣り虫の音絶えて星見えず岳の頂うつすら白し
真庭 唯芳

利根の川水清くして悠久の瀬音を奏で流れて速し
真庭 唯芳

わが子よりくれま草が送られしつるのびのびと垣根こえゆく
真庭 三枝子

午後三時桜ふぶきで前みえず池のかたすみ花いかだ浮かぶ
真庭 三枝子

捨てられた子猫と過ごした十五年我を見つめて死後の旅ゆく
真庭 三枝子

第五回みなかみ町俳句短歌大会作品集

令和6年5月26日 発行

編集／発行 みなかみ町教育委員会生涯学習課

〒379 | 1305

群馬県利根郡みなかみ町後閑321番地1

みなかみ町中央公民館内

電話 0278(25)5025